

産みたくなくなったとき、もはや産めなかつたらどうする？

医療の発達とともに「産みどき」なんて気にしなくていい時代がくるのだろうか。卵子提供を受け、40代半ばを過ぎて2人の子ともを出産したキャリア女性とその家族に会いに米国籍に向かった。

たからさんと伝えているつもりだ。

近未来の家族像を予感させる、1枚の家族写真がある。妻・和実さん(50歳)と米国人の夫・マークさん(47歳)。そして、このマシニマイヤ夫婦によって誕生したというべき二人の子ども。脇に座る女性ジェニファー・ヒュイさん(30歳)は、子どもの遺伝子上の母である。

和実さんが、ジェニファーさんから卵子をもらって実和ちゃんを出産したのは45歳の時。24歳の卵子と夫の精子から12個の受精卵ができ、うち4個を移植した。この時冷凍保存してあった残りの受精卵を使い3年後、48歳で賢ちゃんを出産した。子どもの誕生日やパーベキュー大会など、ジェニファーさんは、今でも2ヶ月に一度は同家に招かれる。叔母のような存在なのだという。

子どもたちにはこの出生の事実をどう伝えるのだろうか。「そうですね、最初はお腹詰まっていたに聞かせましたよ。あなまたみないにかわいい子どもが欲しかったから、ジェニファーさんに卵をもらって助けてもらったのよって」隠したくせず、時がき

たからさんと伝えているつもりだ。

42歳でマークさんと結婚するまで、和実さんは勉強やキャリアを優先してきて、名門カリフォルニア大バークレー校でMBAまで取得し、銀行のマネジャーに。その後再び心理学で学位を取り、カウンセラーに転じた。結婚したとき夫は「子どもは二人つくる」という契約書を結んだという。しかし間もなく、和実さんの不妊がわかる。年齢的にもはや、自分の卵子による出産は絶望的という診断。足かけ3年の治療を経て、和実さんは決断する。「ならば、卵子を提供してくれる人を探そう」

マークさんはといえば「あまり心配はしなかったね」と、人なつこい笑顔を覗かせる。「仮にだよ、ワイフが一人いたとして、それぞれに子どもがいたとしても、全部自分の子どもであることに変わりはないしね」マークさんにとっては「和実がハッピーであることが一番だった」



でいたことも、決めた手になった。

高齢出産のため和実さんは難産病や高血圧を引き起こし、1日4回のインシュリン注射を全国をめぐって入院を度々受けた。まさに命がけで実和ちゃんを産んだ直後、病院でふと思った「この子は誰の子かしら……」しかし答はずるにみつかった。「私と一緒に産むのだから、まされもなく私の子どもだね」熱い思い



IFC代表/不妊治療コーディネーター
川田ゆかりさん

川田さん自身、難病指定の網膜色素変性症であと15年はとて失明する。「自分の病は治せないが、治せる病は治してあげたい」という思いで不妊治療に取り組んでいる

ジェニファーさん(右)から卵子をもらって、実和ちゃん、賢ちゃんを出産した和実さん(左)と夫マークさん「ジェニファーさんに出会って本当によかった」と夫妻は口を揃える。リベラルな米国籍海軍でも、卵子提供者と提供された家族が交流するのは稀である。和実さんのオープンで前向きな性格からだろう



子どもいつ産む？ 仕事どうする？

精子も冷凍保存するスタッフ。卵子の方は、現在は受精前の冷凍保存のみ



不妊治療専門クリニック院長
カール・ハーバート医師

サンフランシスコ周辺は、開放的な文化風土もあって、不妊治療の研究が盛ん。「受精前を培養できる日数が3日から5日に伸び、成功率が一割に上がった」



明るい病室が印象的。クリニックは、事務室と手術室の一角にある。日本と違い、建物の外に階段は一切ない

がこみあげ、涙がとまらなかった。
現在は、育児中心の生活をしているが、不妊治療のカウンセリングと講演を行っている。住まいは、サンフランシスコから南へ20分、海の名産地マリナスにある。電気工事業者を営むマークさんは、前妻との間に20代半ばの子どもがいる。しかし「子育てがこんなに素晴らしいものとは知らなかったねえ」と、目を細めた。
ところで、もしも人生をやり直せるなら、今度は早く子どもを産んでおく、こう尋ねると和実さんは一瞬の間をおいてN.O.と返答した。「30代、30代は全力で仕事をしたかったし、大学院にも通みたかった」。それに若い頃は子どもを産むことが怖かった、私にはお父さんがいなくさう子供

の育て方がわからなかったのね。でも歳をとって、少なくとも今は自分には自信がある」
日本人の両親は、幼いときに離婚した。和実さんが最年少の時、母親が日本人と再婚し、母国に渡った。「子どもにとってお父さんがとても大事。だん痛いはしんどいながら育ったという。和実さんが、男の子候補やシングルマザーという選択をしなかったのは、父親不在の記憶が関係しているのかもしれない」
別れ際「アメリカ式の挨拶をと、やさしくハグをしたマークさんの胸は厚くて温かかった。和実さんが追い求めてきた「ごきそ夫、よき父、良親、かわい子」のいる家庭の温もり」が少しわかったような気がした。

卵提供の謝礼は1回 3500ドルが相場

現在日本には、和実さんのような不妊治療を受ける選択がない。卵提供、代理母、またシングル女性への精子提供などが、まだ認められていないのだ。

米国でもいまだ賛否両論あるのは事実だが、インターネットの普及で、精子バンク、卵バンクは一気に普及した。中には提供者の子宮の写真入りサイトまである。大学新聞の広告欄やスーパーの掲示版には「卵提供求む」といったコピーが躍る。これに応じる人は、どんな心境なのだろう。

「最初は謝礼が魅力だった。大学のボート部で資金が足りなくて、和実さんに卵子を提供したコンニチアさんに、始めた理由を尋ねたところ、悲しい答えが返ってきた」。

「でも10年間不妊治療を続けた夫婦から子どもが授かった感動的な手紙をもらった。うちに、素晴らしいことだと気づきました」。

これまでに例々の夫婦に計10回は卵子を提供。誕生した子どもは、わかつていて、ただで米国各地のカナダに人々はいらる。

最初13000ドルだった謝礼は、徐々に増え上がった。最後には30000ドルの謝礼を受け取った。相場は現在1回3500ドルほどだ。

謝礼を現金に。3年前にサンフランシスコに1軒家を買った。これを相棒に呼ぶ妻には、件目の家を譲る。本業は、カリフォルニア州政府で社会福祉を担当している。

現在、結婚を希望するボーイフレンド

ドと暮らしている。これから先、万が一自分だけ不妊になってしまったら「そのときは、卵提供を受けるなり、精子提供をすればいいわ」
こうした不妊治療を希望するエリザベスさんも、サンフランシスコ周辺だけで10社ほどある。
和実さん自身が不妊カウンセリングをする。1日10時間（インターネット・センタ）では、95年の開業以来、主に日本人カップルの不妊治療をコーディネート。40人以上の子どもの誕生した。日本から来て卵提供を受ける場合、費用は1回約4万円。代理母で1000万円ほど。医療費、薬代、ドナーへの謝礼、カウンセリング費用、弁護士費用、滞米費、滞在費などの総額である。

日経ウーマン

2000年3月号掲載

*使用している記事などに問題がある場合はIFC宛て御連絡ください。